

P5-3 慢性期若年性脳卒中患者に対する社会参加へ向けての動機づけ — “人のためになる” 地域イベントを活用した関わり —

○森 彩華(OT), 衣川 圭祐(PT), 菴原 亮太(PT), 大谷 紘一郎(PT),
此上 剛健(PT)

株式会社 PLAST プラスト訪問看護ステーション

Key word : 自己効力感, (患者交流), (地域イベント)

【目的】若年性脳卒中患者では、長期的に健康を保つことと同様に職業復帰、家庭内での役割の再獲得は重要課題である。それに加え、社会参加や組織的な支援、自分と同様の経験を有した人との関わりも必要であるといわれている。

今回、脳卒中発症後数年にわたり運動療法中心のリハビリテーション(以下、リハビリ)によって身体機能の向上と生活の安定を獲得した事例を担当した。しかし、社会参加に対しては消極的であった。事例は年齢も若く、今後の生活を考慮すると身体機能面の改善にのみ執着せずに社会参加の動機づけが必要と考えられた。そこで、自己効力感が得られる地域イベントを事例と同年代の若年性脳卒中患者とともに企画参加し、その後の行動や発言の変化を確認した。

【事例紹介】50代女性。診断名は陳旧性脳梗塞、左片麻痺。発症から5年経過、身体機能は約2年間著変なし。介護度は要介護2。性格は人見知りで消極的だが、対人交流は好きである。元来外出や料理が好きで、主婦としての役割もあった。現在、週に5日デイサービスや訪問リハビリなどの介護保険サービスを利用し、生活に不便さは感じていない。

【作業療法評価】主訴は一人で遠くへ外出したい、手が動くようになりたい。身体機能はBrunnstrom stage (BRS)左上肢Ⅲ手指Ⅱ下肢Ⅳ。認知機能面は拒否があり未実施。日常生活に支障はない。ADLはFunctional Independence Measure (FIM) 123点(運動項目89点, 認知項目34点)屋外T字杖歩行が連続40分可能である。IADLは買い物や調理は夫、掃除はヘルパーが行う。デイサービスと訪問リハ以外非活動的で、運動すること自体がリハビリの目的となっている。カナダ作業遂行測定(COPM)は「料理を作る」重要度8, 遂行度2, 満足度1, 「知人と陶芸教室へ行く(社会参加)」重要度5, 遂行度1, 満足度1であった。

【方法】社会参加の契機として自己肯定感を得ること

ができ、交流の場となり得るイベントに企画段階からの参加を促す。事例、同年代の若年性脳卒中患者、OTで調理、配膳を行う料理店を運営した。

【結果】イベント後に身体機能、ADLに変化はなかった。COPMでは「料理を作る」重要度8, 遂行度4, 満足度4, 「知人と陶芸教室へ行く(社会参加)」重要度6, 遂行度1, 満足度1と変化を認めた。イベント企画に対して初めは受動的であった。しかし、徐々に参加者同士で調理器具や方法について積極的に話し合いながら実施できた。イベント後は、身体機能面に変化はないが「同年代で頑張っている人もいるんやな」「感謝されて嬉しかった」「どこか出かけてみようかな」などの家人以外とのコミュニティへの参加に対して積極的な発言が聞かれた。以前はできなかった友人との外出も可能となり、ヘルパーとともに調理を行うケアプランに変更となった。

【考察】地域イベントの企画と参加、同年代の同じ経験をした方との交流を通して自己を振り返る機会を得ることができた。また、「人のためになる」ことで自己効力感を得ることができたと考える。以上の経験から、活動参加への積極性や家族以外との交流の増加、家事等に取り組む姿勢に変化がみられた。

地域リハビリテーションの役割の一つとして、身体機能面の改善のみに着目するのではなく、交流の場の提供や自己効力感の獲得、自己受容のための支援を行うことが必要と考える。

【今後の課題】地域イベントへの参加が契機で発言や行動が積極的になったが、運動療法によるリハビリへの依存は残存。今後は、リハビリ以外の時間で自主的な作業活動が行えるような支援を検討していく必要がある。

【倫理的配慮, 説明と同意】本発表に際し、本人に口頭と文書にて説明し、同意を得た。